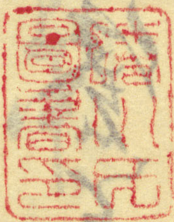
溫故新集

清[illegible]



前語取次之事

一使者参者於玄関一間二間程前ニ使者
相詞ニ而ハ鳥渡の支度を致し前ニ出挨拶ハ
口上の儀を請取りの乃ち其客人の方より参る
内儀様より参る事ハ旅程上人の心得の様と
云ふ迄も是非とも何事も中ニて此の如く
行届ク



一 使者参らん太刀折紙の事 太刀折紙とらし
させ右の膝を立扇を抜一礼して立退き
中あて渡を請右の膝を立て折
紙と太刀とを添て突一礼してさて
折紙を左へ取合せ置し指段の時ハ左右
同じくに指右の膝から突折紙を立扱
太刀を置折紙の上に加紙に立退使者を

請し過礼させて也 作対の位に依り上中
下不同

一 納紙の事 指先を立て膝を突たのみて
折紙を押へ太刀と太刀とを立その腰を立扱
折紙をあたう分御前を出し直し

一 同納紙に先太刀の膝を突右の手に太刀の
中程をもちその方へ回したもとたもとの上より

越抜歩を卒度かゝ人又其の手を其の手此
上より鍼太刀を其太刀の方にて右にて抜歩
とれ少衣抜きさま座して左右用ゆる

一 座躰太刀抜様の事 居人より太刀を抜れ
居人当る様ならば先の宗を清し 其様に見え
敵の太刀を出させし 是秘義納也 同革の時は
居人と太刀を同じくしておきし 下に出の時を

とんだ方もおもて 居人より同を浮き更に抜様に記
させしに 同又法により抜歩を太刀に添わせをと
実清は相違なし

一 抜添太刀乃事 右は太刀を浪する時は太刀を添わせ
出し敵は其方へ切込を返し 又を上にして浪を添し
又た乃方より浪中に時を切るを外し 其人乃
向ふ様に弥猶出けむとして太刀をも小脇へつめた

敷は能也此外ハ折紙を定頼ニ相渡也
条々口傳
一 清華梅添花事花の太刀ハ順ニ相渡
一 十八文此方ニて渡し口傳
一 折紙太刀の事太刀折紙を持花瓶の座と
備之座合御前へ右遣ハ渡し太刀を置
花の上を実太方へ譲と押也退き渡し

清水中其後に成之出座を太刀をも遣し
其の門梅様のひとさ様ニ口傳
一 同頼之の事花ゆ付遣ハ花瓶花の上藤を
実太刀様とも太刀也申合とハ太刀を太刀
川出し花ゆら折紙を押太刀とまり出し
折紙を元座へ同方座之也口傳
一 座の太刀ハ事にハ折也花の上を上ニ実一礼

一 言語といひ中書に渡へし其外一流あるへし
指南は當風俗に依て巻数あるへし
口傳

一 別して大方折紙の事竪にも書候て横折をも書へき
あるとはいへ折紙にて懐中し大方と引けし
假令是一流にて横折紙と申し平に掛き
ある事としても折紙と書き字形を誂方へ公

一 渡と書ても猶きゝ上は大小折紙合入ある也と
中懐へ入は一折紙の如く大方と渡と尤し
て言紙ハたゝむ事折紙とも大方也し

一 同指南の事もぬにとて折紙細合是に限つき
折紙ハ懐へ入る也とて中懐へ入れ
此紙ともして折紙調候口傳

一 自分大方折紙の事大形披露の大方の人は

あり傳へと各代の御紀にあるまじく候にや此

御紀に七寸にて有之事に候

并錺の方へ八柄頭から太刀と諸丸柄に反て

候也同年の時左右源の方より候也し

下より八分御也

一 太刀小鍔の事太刀と太刀の鍔と反の鍔に

拵候事にゆけと太刀の柄源氏の子と実

一 乳して柄鍔と正し所へ柄し太刀の太刀と候と

柄目あて鞘元柄鍔と太刀を源候と可被

譜丸へ也の鞘と太刀小反源氏と実一說

随も同文太の鞘へ太刀と並共に小鍔と並

候ものとみえし是もゆけと下小足事

好ミし也廻柄変說の時も太刀是あり小鍔と

一 並に候

一 太刀ニ扇子持事 扇子を太刀の内の方ニ持添
出し候を能と云 波ニ付扇を左の方ニ引取し
太刀の柄ニ要をあて 波を見太刀を突之
之後扇子を太刀ニ持添一礼して立廻し相懸
乃付て左手を左の手ニて ○を抱へ持当
左手ニて扇子の要を左の下ニ而左板太刀を持添
而て ○ を云字の心得ニ而道也と申候

一 太刀ニ中段構の事 文字構ニ入て、其後左前構中
波ニ而廻り打込ニ而打込候ニ付波ニ文字を
懐中太刀を出すのごとし 抱太刀の鍔ニ左手を添
と固構と云かし 波と文字懐ニ入て打太刀と
波ニ文字一振して立廻し相太刀を押詰し構と
懐より取出し 指添し 何と見申へし
一 太刀ニ刀添事 太刀ニ持添 右脇ニ刃を立一礼

して刀を帯れ上に甚遠邑派とも云なり
突丸帯に於ても実一説(しかるべし)極ると
同前

一 肩衣に帯る小袖の中小袖の下へ(もと上へ也)
二つに打襟と名付の方へ(分)し帯ハ肩衣と襟の
方へ具とあるかしらぬ袖と袖を打出たる方へ
色二と紐とも云 極肩衣としては出し袖とおもし

一 小袖也派と云 突立帯と者也 袖と袖ろ
左方と云へ(り)し道に出し太刀脇へ(也)一説
左方へ出し也 極意也派ともいへ紐(結)也
一 大の肩衣に帯小袖を表と同し帯比ハしハ
襟の方へ(出)し袖ともいへの方に出さと紐といひ
一 ら出し袖といへ帯を出の方に出し派之
同前丸紐出ん帯と出し袖とと付大かとなん

かし膳盃を順に平し左の方に置一礼して
立之時検使の時は渡す時の介錯納め口傳
一 後に右方より持出す事持参を見合せ
しまいに行なりと出し又小袖なへて左の
腕に置き下へ寄て上へ向して置き候時の
右方へ渡し小袖を肩に掛る也但しまさ
膳盃に据る事もなし儀式又あり

人ゆと延べし
一 国持紙は持事数多の時は立て持とも
左の膝を突き右手にて持ち太刀をむく一寸程
なく渡すべし此時は宮銘の方を持添
一 袖之に持て右方の事持参を右方ゟ差
袖を向ひ右方より下に持袖を出し右先
そうと上へしく前の足を左に扇子を置同

かへし渡し置を年紙の古方と云文字之の
こし渡事と申也口傳

一 御小袖積紙の事積紙と共に相袖と云
小袖二つ小袖積と折紙の方にて積申也同袴
の時も左り方へ積也但上下へ上ゟ
なり同文箱を積事同じ口傳

一 同袴の時の袴も上下へ上に積し積し

袴の時も左り方へ積也帷子肩衣と
同前口傳

一 同積積事折紙の左へ前積上下にて積し
紙数之入時は置に積也口傳

一 同太刀積事二つ折中を紙包にてもり
きは小袖の上を折紙の左へ置渡し袴又
の時も置に積置し文字付て置也添紙

右太刀形目録

一 太刀に鳥目の事 鳥目を打拂 左肘
左へ廻し 太刀に鍔の下に添 廻し先
太刀を打ちかへし 返と右ゟかへし 受太刀に
其の鳥目を右手を添 右手ゟかへし 返を押
かへし 受太刀に止

一 同打返の事 太刀を右に鳥目を左に先

鳥目を左太刀に当のとく 定し 太刀に
打ぬき人降 組紙を先太刀を見ゐるを
鳥目を見返へし 鳥目に打ち返し 返し止

一 太刀に弓の事 弓を添ふに打せん太刀を返
柄弓を返を受太刀に打一礼して弓を左へ
返し 太刀を左に打ぬ太刀をとのけに
定弓を先 挟持し 柄太刀を持出 出るを

請し方紀トモ云ヘトモ遁し何と云ハ合得也

一 中り太刀の事ハきけ拍子実を実ニ外れた延
あひあく様ニ討入れ太形せんの
太刀也口傳有之候

一 打刀の事ハ下段の太刀也口傳有し
又不実を実ニ是ニ返事とおもし之事
の太刀也口傳有之候

一 太刀の事 抱書役ニ打せたのあかき掛と
押へたの肘を懐ニ打とつ統して柄の合せ
たちかく鞘を打たとかく掛て打と返し
諸太刀たちの手を挑とくれハ敵役ニ
打とつ統して迄へ打様の事と候

一 主人ニ同太刀拝見之ハ太刀打手の事
知りたる者の者とへ太刀打手の次第

一 人の太刀に梅め紙に上ハ折とも見苦敷候
ば其時ハ見之ハ故ある間無之候

一 主人にて父子なれハ太刀抜様の事并のごとく
お指立人に切先向けて振廻し切先を
我方の方へ返し持て其外ハ尤ハなき
事と存の候也

一 太刀指紙の事 一の足れ下ハ当寂なり

一 寂年寄と指し 一の足れ下ハ中に柄
かまへ候へし口傳

一 御輿の内へ御太刀参らる事 太刀足の方を前に
左に置く中金と云御輿のなれ方を柄の前なり

一 進上之馬のことく輿の内へ入置く口傳

一 盃の時刀指事 指物の柄と刀とを左に置き刀
かたなをして左手の下に置て右手にて抱へし

御肴盃と申説有数記の給ふから載秘刀
とめき御肴刀なし　又三方納申も
有之何差出申也

一　指刀を請取と申ハ出来物にて羽織に立而取出候
言語とこれのまめに而下緒をこきさけ
候て柄ハ右を下に盃事之何も不可有之
又は手代ハ差刀を持申ハ常の役人納

出し候也而只出して給はし可有

一　服紗ハ右手下緒を取添柄を左へ置て御拵へ出し上ル
し居候事にて同所取袖へ柄に出して抜見候ものに又
居候可有

一　亭主御勝手之事も盃渡候之儀有之候に付ては
おし亭主に何か取載して華候服ニて可致
それのまめに而主様より御勝手と相互取と蔵

中ハ諸流共極秘之事ニ而御座候
流々ニより刀を取様之儀數々の仕形有
之候得共下ハ座ニ而刀を指置候
ことニ而候得共指置之儀記ニ及ばず候

一 刀服紗組出し事 組候を刀ハ上ニ挿を載せ
なから小ニ重ね 組候の柄ハ上ニ置へし
右刀小刀の分かけ揃候而者仕形ハ掛ケ出し候而は

右のごとく組中ハ渡し候へし 又太刀なとを
渡候之儀ハ刃を我方へ向け 載刀を下ニ置
服紗を太刀ニ掛る組候之の上ゟ抜載る
刀服紗を指し中ハ諸流共記中ニ候
極秘之入ニ而御酒の加へ呑ニ而候して盃を
太刀持抜之口伝

一 主人の御膳御酒中の事上ニ而続て人之次ニ

一　さてきなと卒度抜合ス也此時ハ柄頭ト
手を添ぬくるなり中ヲ見ル事ハ柳生流ハ
并小刀迄抜入ると云字丸ク小刀の手ハ抜也
此ハ大成刀ハ何レ也必太刀ハ抜也何と
又ろうハ柄云へしも能へさし気扱ハ此と落
又是も大刀ハ脇差太刀ハ落抜へし
何もよし一向に気を是迄事への刀ハ太刀にて

一　居合所要也
立人様と吾身の様を見るへき也並ハ其のとく
右に持又は刀居右ハ手を添右ハ身を実
也○と右ハ尼し次ハ時と時を実ハたる也
是ハ手を添へし其の身の為余り流さる
様に少しも是を寄る事を兼る也
所存口伝

一 立入には小刀をもさる事 插て太刀指たるを添
ものゝ前をゟせよ様に実を之大形扇子の
伝也我小刀を?るゝ時はその方を太刀指
插とすゑを如ん所にもとへし

一 并太刀同小掛事 太刀小刀同道之間をよか
身かゝゐの前をも見えても可也 又立ても
同文同意添ゆ間に?扇子扇子折之

振り指事中七寸付同貫を太刀并は添
立るへし

一 長刀請太刀添事 さげ太刀にて立る者
起をと云様のふて上を太刀に石突抱
小横之刃を上へ置添え七尺七寸同刃を身へ
太刀に太刀の石突を抱 太刀に少に立つ
立懸小太刀を添 右手にて太刀の石突を設へ

なし拵也立べし

一 拵鏡の中にさげ、右の膝に拵也左の膝と
とも実之鏡と之居様ハ左の手と逆手ニ小口
握し石突を人の左へ双と放立べし 下に
立テ押入置之儀心を遣べし

一 同左のかしら拵之鏡と之同道ニて振也し
石突を人ニ向し下小笠ニ而之儀心を遣へし

一 同石突を立之鏡之居様ハ左の手と逆手ニ
持石突を人へ向し 右の手ニ鎗を持双て放立へ
主ニより下小笠ニ押入置て之儀心を
遣すへし

一 同右のかしら拵々持寄し 扨左の手ニ鎗を取
並へし寄切之下へ立置を右の手の下ニ法突
右の手ニ鎗を持双を立へ渡し 横ニ立ニ押入へ立置

使者に渡し候へし

一 同納戸の事 鎧の方へ首をさし出したる膝と
手を突き上げ帽子をかぶり手を添て華族し候へし
極下手をやり右の家を見に付き力を鉛縦の
膝を突たる膝をさしかえ延長して同文に主意を
継しかるへし口伝

一 手挽き事右の家を見て前へ向かう長身乃為とく

抜き様は書し文に記す重ね身は縁に立つ人に答う
事也外へ出して抜かけ手をもちて乗人の首を落す
まれなる候へし免と口伝

一 地蔵法通事掴みたる寸上を右に摘む首を
さす様にあけ取き右手に取て蓋一手して太刀を
鍔(かぎり)を持ち首へ返しかたの脇にて掴む下へとも
右の者太陣と抱き手を上にて本返へ渡し事也

太刀ハ鞘下をとめ候ニ弓弦を抱太刀の方に
立候弓を突一流しあるかまハりまゝにて
立置へし

一 同様鎧の事太刀の方ニ而しかと心得の為しおき
誠に太刀の脇を突様有り橡様を立ゝ者
在之かゝる弓をそへし持てしかるゆくへしに
紐一出て次第か大事之口傳

一 出家人ニ弓抱弓取之時ハ弓ハ他方ニ備也
弓をさゝ弓ハ檀の論を車にてそれ文紙也
鞘の袋を包こらわせ弓弦の方をひよ不沿也
是ハ同人弱後を為弓ニ沿者かつ事也べし
口傳

一 弓銀張袋の事弓ニ大ニ張を出して銀を
太刀抱ニ一統して先行キかゝ銀之袋を抱ゆ

わきえ元結をかしこまりし太刀を小脇にとし
指弓を左の手に引下を右の手に陣を指きて
相手さしに打をまことふ渡とかうよ出したる也
同文庇筋の時も同前然る時は何しも渡る也

一 敵中渡申時かり継渡の上を指なかめ
東方結ひ乃下を地乃の旗をも合せ参るべし
合渡時は元結ぐし蒲（が）波を招き出し大将へ渡し

一 渡し上し申元を結揚旅上し相附矢を指合
数之但附合申と渡し継合指さ矢参り
ともに指こそて出し上し其に出す也渡る也
附を同前

一 主人へ弓と矢と弓上手立出され矢の輪乃
下し附下一番中下を招添えられ陣を渡
中附弓を左へ元結し指足す下をも出して

陣をおさへて左足を踏出し右膝を立居也
右の手を太刀の上よりたゝミと鍔柄の際を
元太刀ニ輪の手を取り落るなと扉めて
手首ヲ肘を膝と実ことし手首を何程
可と揉之、左右ニ手裏へ段ニ降ス処也
詮ニとて又候にさ了之口傳

一 同系人(口)渡事九分ニ捉一重手中手を取太

弟九手の輪の手を取り陣に取分也押ヘ手楊手を
太刀ヲ踏し附乗手下とる左手にて陣を取
渡也之詮九考手先元一元迄何にも当
不及合所宜也

一 主人(口)陸手御前に掛る文左様の事附くり手
一 本手下より搦太刀ヲ取り陣を取込也附
右膝を実太之元取り掴ミ手下より当る

指弽とは不指をすゝむと謂ふ事なり又云伝
指なし拾にかはりなし

一 矢渡し申す時に袖摺の節を指て申す
物の下を指きて紙と云ふ渡し射手に立て居る也
袖摺乃節を五本にてく体に巻きたるを指膝と
実渡し一寸五本に指乃合を実にして
立居し指の紙と太刀同前に御用了

又射法にては有也根矢の附は根小さく射事なり
やはり結て一文根矢も結へ下し居

一 鳥上へ下る鏃をゆるす事鳥の丸は乃方へ矢さ
握革の上を指太刀く引下しと取法にと上へあし
指也矢を同前に取紙にて也与へて手を紙
指のとしては何事前渡し又ゆるす迄に居る

一 半拾弓渡の事又太鏃の上を立て手を渡の

一　弓とく人の弓へ右手をさしそへ候て矢を指せんにて
弓鞢をも小手の中をと下へぬきてそこにおけ
くゝ弓袋の上下に置候て又それより左の手にて
さし入てかたちをおさへ候て所鞢の口をと口ゆひ候
又扇子にて振候ても左の手にて持へし其後拾ひにも
不足とも中なく許れ候へし儀
一　弓上へ鞢をは参らせ左を懐中しさて乃
弓をさし候て拾ひ指にて候てとまし右の手にて
右手をさし左乃時右左手とも参らせ候
又弓袋を小手をさしかけ右鞢をはくはくく
左小手にて真に参らせ置弓の上より右手を
さしはさみ候て何もしまふ
一　鞢弓袋又懐中と右手の左へ出し懐中させの
くゝりをさし候てはし又ぬきてとらし候

詮なく候間前乗人にとらせ候ハ要にて抱と
定て仕手に出るにとるへし

一 同馬上へ上る事 右の方にてもしゝる時返
されの方にあるを前に延へ抱とるへし
下に置ても同し事也 先立事也へし
貴人の客人の方より出る時礼返し返し渡

一 主人馬上にて居る時口取の事 後より出て渡
とするを返し候也 乗候ときは返しに主人へ取
渡して主人の時ともいはめしとく手すへからく渡

一 諸太刀披の事 たとへ太刀をさけて左右とも
まわりてより上の緒をとりて抱へし返すへし
かくのみ前後の請ぬしあるを添へ惣別ハとれ
説ともいへ只一曲になるによく引きを左に送
總而かやうの馬をも世を守まするに人ゑぬ

ゑ慥成差図を以之絶し渡すへし

一 鷹請取渡の事座にて家附名縦ら賀

請取者ハ右の方へ廻り居候へ渡し手ハ其

手ハ鷹を渡す上ハ右の方にて手を突渡す者も

先ハ左の方向へ廻りて渡し候此時左手下にて

紐を相渡し其手縄の端をも渡し鷹をは渡

請取りハ能々太刀川小刀を差添を渡し候

取付又元のことく引返し右の方へ渡し候て可下也

何れも右に准す

一 同請取時ハ右の方にて受取候て縄をハ

手を付渡し候て右の方へ廻り太の方へ出て

置候て請取人へ渡し候て其後引退く

物にて一人にて引渡す時ハ手縄をも渡して

二人の時ハ手縄の役人ハ居つきて可下也

一　同座にて同じ座を揃候時之人
清定不慮の儀有之とも見合せ可申事とみゆる
者ハすまいと申候由し込て八者あるべし
かしく存候二段違可之足を跳候之様
させ可申候へし
一　一ちと当人ハ烏帽子素襖袴を見合し
源氏庭にて舞曲烏帽子掛かくし出つき子細
一　有ハ延し候共とも延し兄を波とあの
候条様子に是ハ出摂政ハ事ハ内談あるべし
祝儀之処引出候ると人並ニ相続候ハ其子細之
一　座にて相見内談わろく出し兄座内合と
候由し
一　当流之人ハ鳥とも上座相出る役者ハ家元の役之
様一段と出る人へハ人ちと承ぬ事とてハ拙者

賞の礼酒の時ハ只々心を〆而何も乃るゝと
えゝと指南ある之右之鞍ハ被下候事当惣と
出て之の時乃参る事

一 御成の時進上之馬ハ何色乃鞍を置之
二疋めくりハ何色にても不苦進上の時も
其斗ハ添方也何も参る事

一 同前鹿毛馬之事御出馬之節も御代参の
御乳母必々中之旅宿御成の時も参る
若衆ハ参るへし事

一 常に人に相る時ハ鞍ハ黒く置候時も
後下人ハ小者ゝ何とも其馬之自然

一 客人へ有之時も鞍を遣し又其もの次第同

一 鞍ニ之渡事其の扱事と持右の方に
置之と之名を云前方と云に渡けし候之様

其後扇を取て左右に置一礼して立揚し
指貫も大方同前之品

一 足ハ左よりも鎧の紐を結び候の事 當方此
つるくこと切付の足ゟ手を入前後をも方へ
如此に右の鐶に足を左の手の鞆の前を
立つけて小指に足を掛右の鐶を左の方に並
並右の手を高くして小足を左の手を抜て小並

一 玄鎧を其鞆を順に逆しひらりとひとひとあつかひ掛
脇ひとひとおろし中押を取一寮方を見て掛鐶を
紫紐をも取て浪をも法に相に鐶を取
右の方に並掛脇ひと掛をも体ひらりひと
並一礼して脇かけ鐶を紫紐をもつてお
立也指貫ハ附も右のとくを並候右を結候し
此ハ神もさせ中也七納組右同前

一 主人より鞍置馬貸にあつかる事 先前輪を見せ申
頭に手を掛 御前に掛 扱後を見せ申 常の如く
こしてまいし 置してまいし 給るの 御礼申上る
時の人躰に納へし
一 鐙御貸にあつかる事 拝むやうにして胸の方へ見せ
申 古を金をまいし 納時と同前也
一 馬に仕候とる 鞭を御貸にあつかる事 常方と
たつし鞍の前を持 胸を見せ人の方へひけれ貸に
可受侍
一 轡出す事 左右に引 手を立ちを持 左にたこれ
くつわを持 古一礼して後 渡候 相同前
一 主人より御貸にあつかる事 常のごとく 拝み御常のごとく
引手を見せ人の方へ左右へ向て置し 大形にて
人躰に置へし

一 齋波文當敷之ハ先齋ニ波ヲ結之事之
大緒ハ三ヒ半石石ヘ取潰ニ石ヒし
同革の附に結ひて波ヘし 当波大緒捻ヘ也
又の大取馬丸ん附ル波ヘし 大鷹ハ附に
大緒を一節結ひかくる一節を下へさけ
波へし其を同意也何成も也口傳

一 齋波附之事 鷹乱也所要之 秘事

乃鳥ゟちて波へ々取たんへ附尾羽と
尾七つ尾文たる也

一 齋渡同大革先結ひゆくたるを二つひ
たるハ板かけりと二つつるハ又たるを一つ
かけて二つつるハ板渡を御同小尾附を
尾の下へ結ひそ尾先をとるよふに
見せ尾先に結ひとゆあるものとくすべし

始る丸計訶しきを云ふと云へしてに地を実ね
へ下何も足あることをつくと採へし小鷹に
渡せ又居起ゆる也と又大鷹にハ計肌をらひ
さ也若鳥も其丸緒ふ守せさのに足をもつく
るへき者居肪見ふ云ハつ也と余く口傳

一 鷹の鴨鶉を取て其鳥を胸毛を拵るの
立つしたるを突ハこを頭を云梅花へ入精液

随し請丸根たるとも山鳥を取るとものとき
取り山鳥を取る胸毛を拵るの好る見ることへ記て立
へし又是を鳥を取ね丸太にゆふの也渡事あるへし
口傳

一 鷹の鶴雲雀足付に鏡を事好当事附の足
口傳

一 鷹の鳥を取籠所に事ありて右の時ハ三度ハ

一 女鳥をとらへ進せ候ハゝ男鳥をとらへしく
鳥の所を押おさへ右の方へよせても家に
とる時も雌雄の心得を用意之頭方を頭へ
なし置候也 口傳

一 鷹の鶉雲雀の様なるを渡す事右の指上を
ひらき左手にて鈴のあしを抱おさへ
渡し是も對手の膝ふまへ下とらへへし

一 日挟物の事 行と別所と上へ首を持て挟ミ鳥の
足を緒にて結て緒を通し過る数の過行の書
並緒して節の足を足合持て組緒に仰と
まふ挟へし

一 鷹の鳥掛候の事 山の前日の縁と心得へし
山緒に皮めて掛へし 日緒に縄之すハ下れ
緒めぐり上にて早く置よ 枝上をとらへ一方ともに

緒切之同因縁にて下ハ緒ぬきより六寸ほとぬひ
候上ハ横手ほと一方をぬき緒切之

一 鷹鶴ハ七寸斗ほと切のことく切ほし何も
其紐同跳小序にすへし 口伝

一 鷹丸足革の渡りとや鷹ハ足革なき之鷹
也ハ緒足へ革足革とハ不吉也

一 足生頭ヲ小口ニ紫革武紫鷹も同前之

一 大鷹足革長サ七寸斗山形の廣さ隙見鷹も
大形同前之緒ハ細きハ能之革ハ大形同前之

一 小鷹丸足革長サ六寸斗山形の廣さ六七分能之
何も足革ハ山形の廣さハ能之細きハ不吉
むけ西猫さしの之とも大鷹同前之又鷹ハも

一 徐し

一 緒寸法の事大鷹ハ弐尺又三尺三寸小鷹ハ

一 七ヶ條之事ハ不定之
一 ざひハ年とさしたるとの事也
一 小嚢ハ始けつると申へしやけひと云ハ太刀の
るの頭かなへ又ハ太刀尾かしら付之柄取柄の
ところ振て吉円ニりさるを寅ほりさの朸
振ニする之見とさひたる付ちた三之席此
ところて取ゐる為へりざとて掛席たり

拳之川たるゆへ構ちたる之見ハ為と也
此不時の事之何ゟ口傳
一 おほきりの後と云る小嚢の鉄之緘ハ為と
云すして切と始けつる也呼出ハ拳也へ
しるしかと云之
一 小嚢之付鎧別ゟとりとすいふちとりの血
付る振ニ為ニも出愛出不及口傳

一　鳥縫と云ハ名と云尾羽を頭より其尾巻之
縫分と云なり

右廿冊者雖爲秘事依御執心深
懇記進之畢努〻不可有外見者也

水嶋卜也
之成

横山三郎右衛門
時連

早川茂右衛門
爲逢

原田傳内
元陳

村田小平太

寶暦十二壬午年

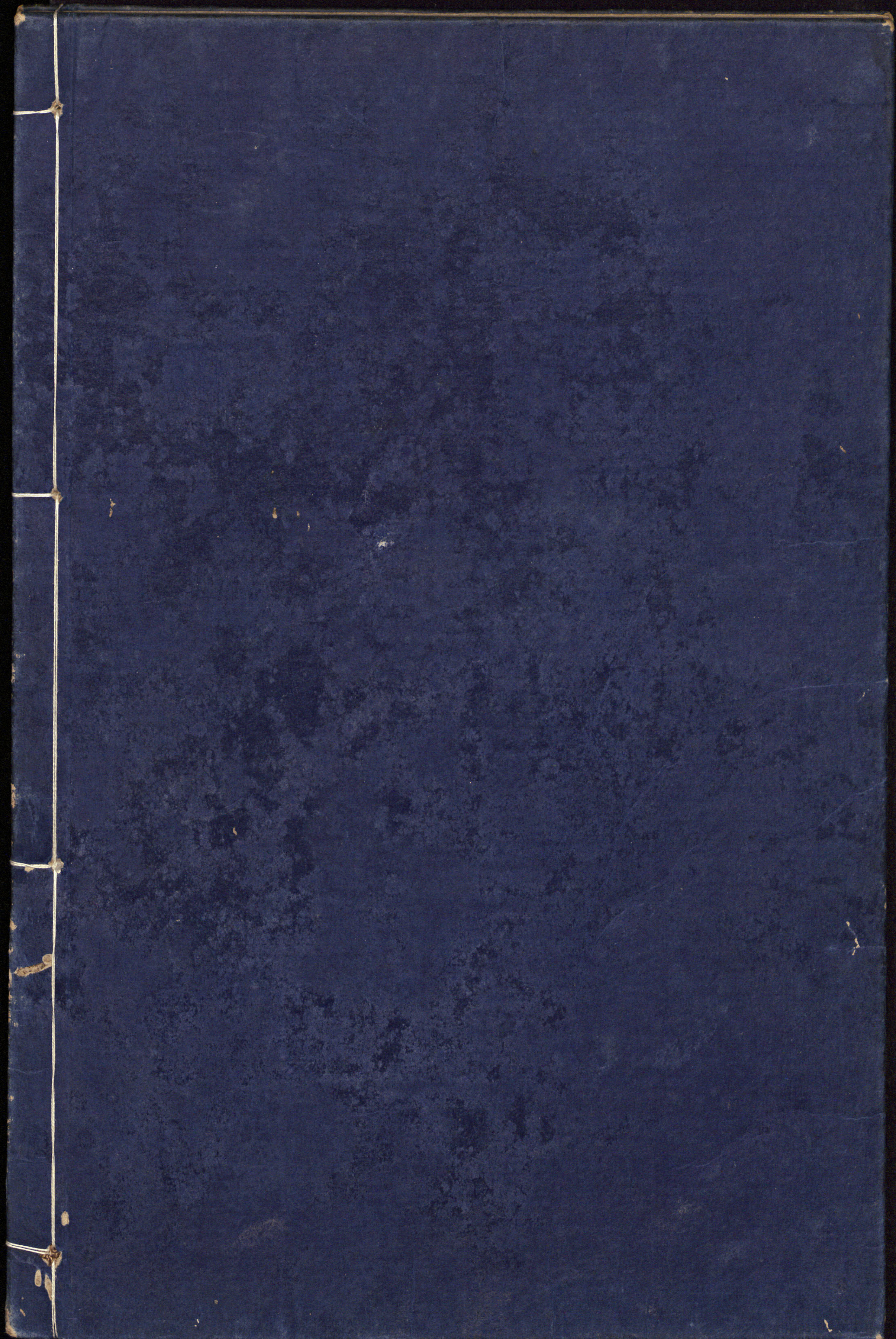
十月十日



信令



津村作蔵




H+K 2
GretagMacbeth™ ColorChecker Color Rendition Chart
15.01.2002